

生理学会による生理学教育に関する情報シェアリングの促進

昭和大学医学部第二生理 / 生理学教育法シェアリンググループ 渋谷まさと
慶應義塾大学医学部生理学教室 / 生理学会若手の会 小泉 周

情報は共有するとパワーアップする。生理学に関する教材、まとめ、知識、実習・実演マニュアル、哲学、切り口、意見、疑問などの情報を学生さんと教員、臨床家と基礎学者が共有し合うことにより、生理学の勉強効率はより良くなるはずである。しかし、自分の授業ノートを他の教員に公開している教員は多数派であろうか？試験の後、正解と採点を学生さんと討論し合うことは常識であろうか？義務として情報をイヤイヤ共有するのではなく、相手からのフィードバックを求めて能動的に情報を公開、共有する低姿勢、すなわち「情報シェアリング」が有効であると思われる。

では、生理学会として、生理学教育に関する情報シェアリングはどのように促進できるであろうか？生理学会の末席に座らせていただいている会員として、僭越ではあるが、OPINIONさせていただきたい。提言の結論はデジタル教材を研究論文と同列に扱うことである。

1. デジタル教材の充実（方針）

従来の書籍などの教材と比べ、デジタル教材の利点としては、新しい情報を発信する回転の速さ、情報発信者から情報受信者までの伝達の速さ、コピーの作りやすさ、閲覧のしやすさによる情報伝達の浸透度の高さ、画像、音声、動画など at a glance 的情報の多彩さなどが列記される。デジタル教材が医学教育に重要な位置を占めるようになることは疑いないであろう（How the Internet will change the way we teach medicine; S. Uijtgehaage, 昭和大学のホームページ <http://www.showa-u.ac.jp/> > 医学部 > 医学部助講会 > 昭和医学会臨時例会）。生理学においてもデジタル

教材がますます充実する必要があると思われる。

2. デジタル教材の公募（手法1）

生理学知識の体系をデジタル化する方式のひとつに分担方式が考えられる。各分野の専門家から適任者を選出するのである。この方式は従来のやり方であり、メリットも多い。しかし、デジタル教材をやりとりするインターネットは、境界のない世界である。誰でも何でも発信できるメリットを最大に生かそうとするなら、分担式ではなく、公募式が適当と思われる。第一、分担しようとする、頼まれた人も頼まれなかった人も「何で？」と言い出す可能性があるため、人選だけで疲れてしまう。生理学の体系をいろいろな人がいろいろな角度で眺めており、独自の表現が巷には多くある。初めて学習する学生さんの「要するにこのように考えればいいんだな」などもどんどん集まるようなシステムが必須と思われる。デジタル教材を公募することにより、生理学を初めて学習する学生さんから名誉教授まで、あらゆるレベル、視点からの情報シェアリングをお願いできるわけである。

3. 応募されたデジタル教材の審査（手法2）

応募教材は玉石混合であろう。科学的正確性、デジタル技術のレベル、オリジナリティー、わかりやすさ、学術的レベルなどを第3者の立場から客観的に評価する必要がある。研究論文に関しては、雑誌を中心に学会をあげた審査がなされているのではないか。投稿論文をレフリーが審査し、改善のためのコメントを手弁当で進言しているのである。デジタル教材に同様のシステムがないこと

の方が不思議ではないだろうか？

4. 審査されたデジタル教材の公表（手法3）

ある一定のレベルを超えた教材を「生理学会認定デジタル教材」として生理学会オフィシャルサイトからリンクし、日生誌に発表するのはいかがであろうか？よく言われることであるが、教育に関する仕事は「業績」になりにくいことは否定できない。しかし、学会に認定され雑誌に公表された教材ならば、

学会活動

1) 生理学会認定デジタル教材作製：「一歩一歩学ぶ心電図」Digital版，2000年10月4日バージョン（http://edu.showa-u.ac.jp/physiol_share/ECG/）日本生理誌 2000 vol 62, p 308

2) 生理学会認定デジタル教材作製：「生理学質問受付箱」（<http://www.med.keio.ac.jp/amane/question.htm>）日本生理誌 2000 vol 62, p 308

などと個人個人の業績集に書けるではないか。これは、すでに業績としてみとめられている書籍にひけをとらないと思われる。書籍は一教員と一出版社のみで世に出すことが可能である。公募・審査・公表構想では、複数の生理学会員が首を縦にふらなければ「生理学会認定デジタル教材」としての業績は達成されないわけである。

6. 最後に

要するに、デジタル教材を研究論文と同列に扱おうというわけである。このような構想を学会レベルで実現している学会はほとんどないと思われる。

研究から得られた新知見を情報シェアリングしない生理学会員は一人としていない。「デジタル教材を情報シェアリングしない生理学会員は一人としていない」が成立したその日、学問としての生理学、組織としての生理学会は21世紀を疾走するにふさわしいアイデンティティをますます確立するのではないだろうか。

7. 追伸

学術大会や各委員会などで上記構想を検討、討論していただきたい一方、インターネット上での公開討論の場として電子掲示板を用意した（<http://samba.physiol.med.keio.ac.jp/opinion/>）。生理学、医学教育に関心のある方なら、学生さんから名誉教授まで、生理学会員も非会員も、どなたでも匿名で書き込み可能である（もちろん、公開も歓迎）。ご感想、ご意見を個人として、また各委員会として述べていただき、具体的な行動計画をみんなで練り上げていこうではないか。